

南北朝時代の仏教研究の 展望と課題*

鄭 柄 朝**

(韓国 金剛大学校総長)

序 言

中国の人民大学と日本の東洋大学、そして韓国の金剛大学校が十年計画の下、共同で進めている仏教の東アジア的受容と変容に対する研究は、当該分野のみならず、仏教学研究において深化と跳躍とを期するためのものです。昨年、その第一回目の研究と討論のための学術会議が韓国で開催されましたが、主題は「東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と変容」でした。

人民大学が主幹する今年の学術会議の主題は「南北朝時代の仏教思想」です。十年間にわたって進められるメイン・テーマの性格上、今後も論議の大部分は南北朝時代を中心として、隋・唐時代の仏教と、七―八世紀の東アジア仏教思想の推移をあわせて眺望する形で進められるものと予想されます。

基調講演という性格に合わせ、本稿では、当該分野で扱われる個別的なテーマに対するアプローチよりは、南北朝時代を中心として進行した仏教の受容と変容という問題にアプローチする視点について、より巨視的な視野から述べていきたいと思います。私は、この分野の専攻者ではありませんが、本大学の仏教文化研究所で進めているプロジェクトを見守りながら感じてきた点を反映させようと思います。

南北朝時代の仏教の研究において、古典と称されるべき研究成果は指折り数える程度です。湯用彤の『漢魏両晋南北朝仏教史』(1938)とE. ZürcherのThe Buddhist Conquest of China(1959)は、極めて先駆的な著作

*原題「남북조 시대 불교 연구의 전망과 과제」。

**정병조 (チョン・ビョンジョ)。

でありながら、同時にこの方面の研究の礎石の役割を果たした膨大な著作です。次いで、Kenneth Ch'en の *The Chinese Transformation of Buddhism* (1973) が、その後を継いでいると思います。

1980 年代以降では、日本の学界および中国の学界の研究成果を網羅し整理した鎌田茂雄の『中国仏教史』シリーズも、逃すことのできない成果です。

これらの研究成果は、当該分野の研究者たちには古典であると同時に、研究の出発点でもあります。しかし仏典が膨大であるのと同様、中国についてもやはり思想的な観点や文化的な特殊性などにおいて、一言で要約するのは難しい重層性と多様性があるのは事実です。もちろん地理的な広大さも含めて議論しなければなりません。中国、特に南北朝時代の中国は、漢族はもちろんのこと、西北方をはじめとする四方の異民族たちもやはり中国の歴史と文化の重要な主役として登場します。中国歴代の王朝が漢族中心であったのとは対比される特徴です。それほど多様な文化と思想が混在するほかなく、そのような多様性に中国の膨大な地理的特殊性が重なります。多様な文化と思想、異質的な民族が介入してきたこともあり、その生の様相、文化の軌跡もまた複合的になるほかありませんでした。そして、そのような重層性の中に最もはっきりと浮かび上がる二つの文化的な幹が、まさしく中国固有の文化と仏教に代表されるインド文化でした。中国伝統文化と仏教に代表されるインド文化が、諸民族と文化、広大な地理的な環境を背景として浮き沈みを繰り返した時代であったため、南北朝時代に限って言えば、中国伝統文化も仏教文化も、一つの一貫した体系として理解するのは不可能であると言わねばなりません。すなわち多様な可能性を念頭に置くときのみに、アプローチが可能な時代が南北朝時代なのであり、また南北朝時代の仏教思想であると言わねばならないでしょう。

このような点を念頭に置きながら、最近、二、三十年間の注目すべき研究動向について簡略に言及し、それに基づいて幾つかの提案しようと思います。

一 南北朝時代の仏教研究における最近の注目すべき動向

本章で扱うのは三つの大学の共同研究が進められた一種の契機を述べることです。参考までに申し添えると、これらは本大学の仏教文化研究所の研究者たちが注目している先行研究です。同時にこれらの諸研究は注目の対象であるだけでなく、そこから導き出される研究成果自体が、今後三つの大学の共同研究がどのように進んでいかなければならないかを示す先行事例であるとともに、今後の研究方向に対する指針ともなります。論者の提案を説明するために、まずこれらの諸研究の特徴を簡単に整理しようと思います。

1 日本の京都大学の「北朝後半期仏教思想史」および「真諦三蔵とその時代」に対する共同研究

この二つの研究は、すべて日本の京都大学人文科学研究所が中心となって進めたものです。二つの研究はどれも南北朝時代の後半期を対象とするという特徴があります。ただ前者は北朝をテーマとし、後者は南朝後半期の真諦三蔵とその周辺に関する研究です。研究成果はそれぞれ荒牧典俊編『北朝隋唐 中国仏教思想史』（法蔵館、2000）と船山徹編『真諦三蔵研究論集』（京都大学人文科学研究所、2012）として刊行されております。

前者は「序章 北朝後半期仏教思想史序説」と「第一章 南朝仏教思想から北朝仏教思想へ」を中心としますが、主として地論思想の問題を扱っています。そして、その周辺の問題として、北朝仏教時代の石窟寺院と中国伝統思想の問題、そして南北朝後半期の仏教思想の前提として『成実論』の問題を、前後する問題として隋唐仏教思想の問題を視野に置いています。

後者は同時代の南朝で活動していた訳経三蔵である真諦と、そのテキストおよび思想にいたるまで、集中的に研究調査を行った結果です。いわば真諦を中心とする撰論学の問題が主要テーマとなっていると言えます。

二つの研究はみな日本の当該分野の主要な研究者たちが参与した結果であり、基本的な出発点においては敦煌出土写本の役割が少なからず寄与したと考えられます。もちろん後者の場合には、敦煌写本以外にも、現存す

る真諦の翻訳経論との比較の問題もやはり主要なものとして作用したと推測されます。

全体的に見ると、両者はみな、敦煌出土写本を対象とする文献学的アプローチと、思想史のアプローチとを前提として、その周辺を総合する形で研究が進められたものと見られます。仏典の翻訳態度を土台とする文献学的アプローチと中国石窟寺院から見られる土着思想との融合などを扱うことにより、従来の研究よりも一步を進めたものと評価できます。ただ、その思想の流れが、隋唐時代にどのように展開するかというプロセスへの論及が不足しているという感を持ちます。

2 中国の蔵外仏典文献の刊行事業

この事業は中国の全国古籍整理出版事業の一環として、方廣鋁先生が主導的に率っている事業です。敦煌出土の仏教文献などを校勘し、関連研究論文とともに収録して、人民大学出版社から現在も十五輯を超えて、継続して刊行中です。

その分類を見てみると、梵文典籍の新訳、漢訳蔵文仏典、南伝仏典、佚典遺珠（佚失していたが、新たに発掘された仏典）、仏典異本、敦煌禅籍、仏教懺儀、三蔵論疏、三階教資料、阿吒力教典籍（雲南地域の瑜伽密教典籍）、敦煌経録、西夏佚典、石刻資料、疑偽経などと、関連する研究論文を収録しています。たいへん広範囲な分野と時代とを網羅していますが、この中、多くの部分は敦煌遺書です。そして、よく知られているように、敦煌遺書は南北朝と隋唐時代の仏教の新資料を大量に含んでいます。

ただ、この事業は時代的、思想的な範疇としても広範囲であるため、集中的に活用するのは容易なことではありません。そうは言っても南北朝と隋唐の仏教を研究するための文献学的な土台を提供する重要な事業の一つであるという点は看過することはできません。

このほかにも 80 年代以降、中国各地で敦煌学に対する研究が広範囲に進行していることを知っております。敦煌学、特に敦煌宝蔵に対する研究は、必然的に南北朝時代の仏教の研究に新たな観点を提供する基盤として作用するものと期待されます。これまでの敦煌文書研究は、新資料の発掘という観点から進められてきましたが、今後は内容の分析を通した客観的な理解がより必要であると思います。特に初期の敦煌文書の研究は禅宗関

連の文書に集中してきましたが、今後、諸宗派に対する研究を並行させていくことによって、成果が期待できると考えられます。

3 金剛大学校の地論宗研究と蔵外文献の刊行事業

金剛大学校仏教文化研究所は、2007年から人文韓国（HK）プロジェクトの一環として、仏教の中国的（あるいは東アジア的）変容に対する研究プロジェクトを進めております。この研究プロジェクトは、主としてインドの大乗仏教典籍が中国に受容される過程で起こる翻訳と受容、そして変容の問題を対象としています。当然、受容と変容の過程を理解するための多様なアプローチの方法を考慮しなければなりません、その中心となる方法論の一つが文献学的アプローチでした。

しかし同じ仏典と認められる梵本（あるいは蔵本）と漢訳との間の単純な比較だけでは、中国における受容と変容の過程へのアプローチには限界が存在します。このため、インド大乗仏教と隋唐時代の中国的な宗派仏教との間に重要な接点として存在する南北朝時代の仏教思想の研究に集中するようになりました。その最初の研究の成果が、すなわち『地論思想の形成と変容』（金剛大学校仏教文化研究所、2010）と『蔵外地論宗文献集成』（同、2011）です。今後、『蔵外地論宗文献集成』の続集と『蔵外撰論宗文献集成』とを順次刊行する予定であります。

この事業もやはり基本的には敦煌出土文献に基づいて、南北朝後半期の仏教思想史にアプローチを行う点に中心があると思います。地論宗はその他の仏教学派に比べて関心が少なかった分野であることもあり、このような研究を通して仏教学派の客観的な集成がなされるものと見ております。

4 人民大学・東洋大学・金剛大学「仏教の東アジア的変容」に対する研究

最後に紹介するのは、いまこの場で進められている学術会議です。基本的には十年間にわたり進められる学術会議ですが、その中には関連する専門家の意見交換と当該の主題に対する研究成果の韓中日の三国での共有という前提が含まれています。

三つの大学を中心とすることではありますが、各国の関連する専門家たちが研究成果を共有する場となるということです。中国仏教協会の会長を

務められた故趙僕初会長は、夙に、韓中日の三国の関係を「仏教の黄金連帯」という言葉で表現されました。東アジアの三つの国は仏教という共通分母を歴史的に大切にしています。したがってこれまでの友好を中心とした段階を脱し、この場で試みている「学術的研鑽」は、三国の未来志向的な発展のための時期に適った試みであると思います。

この企画には「仏教の東アジアの変容」というメイン・テーマの下、さらに十個のサブ・テーマに分けて関連する研究成果を網羅し、共有しようという意図が含まれていると思います。重要な点は、関連する研究成果を共有することで、各国の専門家たちに見られるであろう理解や視野の限界もある程度は補完されるのではないかという期待です。すでに知られているように、昨年には韓国で「東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受用と変容」をテーマとした成果の共有がなされ、今年、この場では「南北朝時代の仏教思想」に関する研究の探求がなされております。

二 視野を拡張するための幾つかの観点の提案

これまでは論者の関心の範疇にしたがい、南北朝時代の仏教の研究に関する幾つかの注目すべき最近の動向に言及してきました。これらの研究の最も大きな特徴は、ごく一部分を除けば、大部分が仏教文献と仏教思想史の研究を中心として行われているという点でしょう。仏教が単純な教義の体系、すなわち思想の体系であるとすれば、このような研究は大変有効なものでしょう。しかし周知のように、仏教、特に南北朝時代の仏教は、宗教現象であり、文化現象であり、社会現象であります。換言すれば、思想、信仰、経済、政治、民族に至るまで、多様な現象を含む複合的な文化現象であるということです。そして、そこにはさらに仏典語として梵語と胡語、そして文語体の漢文と口語体の漢文などの多様な言語の問題と、仏教伝播の経路にある西域と東南アジアという地域仏教の問題まで、解決すべき少なからぬ問題が介在していることを看過してはなりません。特に王室や教団の主たる業績よりも、民衆たちの胸に流れる普遍的な仏教思想などに対しても、幅広い理解が必要であります。支配層の仏教受容のように洗練されてはおりませんが、日常のかつ現世利益的な、彼らの仏教観を理解することに努力しなければなりません。哲学的な観点から言えば、高邁

な理想を抱いていた上流層の仏教者たちが、劣っている大衆たちの仏教観を高揚させるために「どのような」努力を行ったかについても、やはり研究の対象にしていかなければなりません。

以下には、この点を勘案して、三国の三つの大学が、今後、研究を成功裏に進めるために関心の幅をもう少し広げていければ、という論者の期待を述べようと思います。

1 文献学的研究における協力の強化

南北朝仏教の研究において最も基礎的な資料は、いずれにせよ一次資料であるといえます。特に敦煌宝蔵に属する仏典関連資料は、ごく一部を除いては大部分、アプローチが可能な状態にあります。その他にも石刻資料を含めた、少なからざる資料が収集され、また公開されております。見方によっては、豊富な資料であると言えるほどです。豊富であるということは、公開されている部分についてさえ基礎的な研究がなされていない資料が、いまだに大部分を占めるという意味です。また、公開されている資料についても、十分には研究されていないという意味を含んでいます。このような状況は、徐々に改善されつつありますが、それでも早期に解決するとは見られません。結局、状況を改善することのできる新たな形態の協力作業が必要であるという意味です。

金剛大学校仏教文化研究所で刊行した『地論思想の形成と変容』と『蔵外地論宗文献集成』は、我々が模索することによって到達した新しい形態の研究による成果です。この二つの成果は、中国と日本、そして韓国の研究者たちがともに参与したものです。前者は地論宗の思想に対する最近の研究動向と思想的研究とを収めていますが、地論宗研究に関連する文献と資料、そして思想的研究のための出発点として活用できるように企画したものです。これは韓国語と日本語とで同時に刊行されました。後者は敦煌出土文献の中で地論宗関連の写本だけを集成したものであり、それぞれのテキストに対する韓国語、中国語、日本語の解題が含まれています。韓中日、ひいてはその他の国家の地論宗の研究者たちが、より容易にアプローチできる、より進化した形の資料集であるといえます。

例えば、方廣鋁先生が主編を勤める『蔵外仏教文献』の場合にも、三国の関連する研究者たちの協力により、テーマごとに、そしてよりアプロー

チしやすい形での再編集が可能でしょう。そして三国の協力作業ではない場合でも、テーマごとにアプローチしやすくすることは、関連研究の深化と成熟に大きく寄与できるものと期待されます。

2 社会思想史的な研究の融合の必要性

普遍的な形で言えば、歴史学者と哲学者、そして宗教学者の視点の間には、大きな距離が存在します。特に、南北朝時代のように、社会的、思想的に、そして信仰史的にも混乱した時代であれば、なおさらです。

しかし惜しまれることに、ほとんどすべての南北朝時代の仏教研究者たちを見ると、大部分の関心は、仏教の典籍に重点を置いている状況であると言わねばなりません。文献研究は必須ですが、それが仏教研究のすべてとなってしまうはいけません。最近の学術的なトレンドのように複合的な研究システムが必要な部分であります。むしろ、南北朝時代全体を眺望する広い視野から仏教にアプローチしなければならないという点では、昨今の研究者たちは序言で紹介した幾つかの研究者たちに比べ、はるかに良い条件にあるにもかかわらず、むしろ狭い視野に止まっているといえましょう。

少なくとも東アジア社会における仏教は、インド仏教とは異なり、社会体制内の存在であったことを念頭に置いておく必要があるでしょう。中国仏教の定着に際し最大の難点は、仏教の出世間的な性格にありました。そこから中国仏教は忠孝的な特性、護国護法的な思想、そして自立的な労働観などを唱えるに至ります。このような土着化の努力は仏教導入の初期から進められましたが、南北朝時代になって完成されたものと理解できません。南北朝時代は、仏教教団史の面から見てもインド仏教から中国仏教への移行期に当たります。そして、そのような外的な規制は、思想の変動にも、やはり一定の影響を与えずにはおらなかったと考えます。そして、同時に仏教の上部エリート層を含め、土台を構成する広範囲な民衆層の信仰形態の変遷もやはり、社会変動と不可分の関係にありました。見方によっては、社会変動に多くの影響を及ぼしたと考えられる当時の民衆層の信仰形態は、いまだにきちんと光が当てられていない状態であるといえましょう。

2007年にE.ZürcherのThe Buddhist Conquest of China 第三版が刊行される時に付された解題の中で、Stephen F. Teiserは、1998年に李四龍と裴勇

との中国語の完訳本が刊行されて以後、中国学界の南北朝時代の研究、特に方法論的アプローチにおいて有意義な変化が見えると指摘しました。これは断片的ではありますが、重要な点を示唆しています。すなわち南北朝時代の仏教思想を研究する際、「心学」、つまり思想的な研究に長い間沈潜していたことに対する反動であると考えられるからです。換言すれば、信仰集団、あるいは寺院集団、ひいては仏教思想を受容し、再生産してきた仏教教団に対する社会思想史的なアプローチが、この時代の仏教思想の受容と変容を研究する場合、十分に活用されなければならないことを指摘したいと思います。

尚永琪の『3-6 世紀仏教传播背景下的北方社会群体研究』（2008）や、何方耀の『晋唐时期南海求法高僧群体研究』（2008）など、最近の中国で刊行された一連の研究成果は、南北朝仏教の研究において社会思想史的な観点を導入した、新たなアプローチの事例となるでしょう。そして、そのような研究成果は、既存の思想史的研究に補完しなければならない重要な端緒を提供してくれると思います。

3 地理的な視野における深化と拡張；インド、そして西域とインドシナ半島

次に申し述べたいことは地理的視野の問題です。地理的視野と言いましたが、その中には環境と民族、そして文化の問題が含まれています。南北朝時代の仏教を論ずる我々の観点を簡単に、そして素朴に表現するならば、我々は江南と江北の違いにだけあまりにも執着しているのではないかと思うのです。南北朝時代の仏教は、狭く見れば中国を中心とした東アジアの問題ですが、広く見れば仏教の出発地であるインドから中国地域に至るまでの多様な地理的背景を必然的に前提としなければならないもののなのです。

まずインドを例にとれば、慧超の『往五天竺国伝』で言う「天竺」は、現代人たちが思い浮かべるインドとパキスタンという地理的範疇をはるかに超えるものです。一般にシルクロードの沿線と理解されていた月支国（今日のウズベキスタンおよびカザフスタン）はもちろん、バーミヤンとカイバル峡谷一帯（アフガニスタン）を含む広大な地域を念頭におかなければなりません。9世紀初に活動していた人物の地理的な視野を基準と

する時、南北朝時代の仏教人たちの地理的視野もやはりそれほどは違わなかった可能性が大きいと思います。また今日のインドとパキスタンという範疇で、あるいは仏教インドという範囲に限ったとしても、その中に存在した人文地理的な多様性は、「単一の幾つかの仏教伝統」では説明が不可能であると思います。それにもかかわらず我々は出発点としてのインド仏教を、あまりに単純化させる傾向があります。思想的、文化的にもそうです。断定的に「こうだ」と確定できることは、むしろごく少数に過ぎないと見なければなりません。

次に、南北朝時代の仏教の受容経路として、陸路と海路の二つがあります。陸路はよく語られる西域が、そして海路は、東南アジアが地理的視野に入ります。南北朝時代のこの二つの地域に関する情報は、中国側の記録を除けば、それほど多くありません。実際は中国側の記録も多くはありません。それにもかかわらず、この二つの地域の仏教を考慮しないで、南北朝時代における仏教の受容と変容の問題を、インドのそれと単純に対比することは危険であると思います。当時、二つの地域の仏教が持っていたアイデンティティの多くの部分が曖昧なままに残っているとしても、少なくとも南北朝の仏教、あるいは東アジアの仏教受容を研究する研究者は、これらの地域の仏教を念頭に置いていなければなりません。

インド仏教の場合、我々は多くのテキストを持っています。特に思想と文化と限定して言えば、インド仏教に対する大部分の地理的な情報は、漢訳された情報であるといえましょう。文化思想的な地理情報と関連して、漢訳されたテキストを扱う際に注意しなければならない点は、漢訳テキストの多様な異本の間に存在する層位と、テキストに内包された思想的な層位をもとに追求を行うことで、インド仏教における文化思想的な状況をまず検討した後に、受容と変容の問題を扱わなければならないという点です。

これが、インド仏教をあまりに単純化させた状態で南北朝仏教の変容を語る時に引き起されるであろう誤りを最小化しうる、一つの方法論であると思います。事実、多くの場合、翻訳されたテキストである漢訳仏典は、言語の異質性に由来する誤訳の問題を内包するしかありませんが、同時に誤訳であると語られる問題の相当数が、事実は既にインド仏教に内在していた、時代と地理にともなう文化思想的な層位の問題から始まるものであ

る点を看過してはなりません。

特に西域と東南アジア地域の仏教に関する情報は、多くはない遺跡あるいは遺物と、求法僧、あるいはインドや西域から中国に渡来した僧に関連して言及される、極めて断片的な記録によって得られるだけです。しかし、これらの地域の仏教は、南北朝仏教、あるいは地理的に中国仏教の前段階としての役割を語る時にはインド仏教に劣らない重要性を持ちます。仏典解釈上のいくつかの事例や、あるいは仏教の文化的な変容に関するいくつかの要素は、これらの地域の仏教と関連があるためです。特に南北朝仏教、より限定して北朝の仏教は、西域仏教と不可分の関係にあります。これは社会史的にも思想史的にも、南北朝仏教の理解に、西域仏教の理解が極めて重要であるということを意味します。また、これが次の文化史研究の成果の活用の一必要性を提案する理由でもあります。

4 文献思想研究と宗教文化史研究との融合

最後は宗教・文化史的なアプローチの必要性に対するものです。仏教の思想的構造は一朝一夕の結果ではありません。それは広範囲な下部構造の支持を要求します。そして広範囲な下部構造により支持された上部構造は、再びそれを象徴と儀礼として現象化すると論者は考えております。仏教という宗教現象、あるいは思想現象が上部構造に該当するとすれば、最下層の民衆から最上層の社会支配層に至る信仰現象は、それを支持し、支える下部構造に該当するでしょう。そして、象徴と儀礼は多くの場合、その結果に該当します。

よって南北朝時代に、社会的・地理的に多様な階層から構成された信仰の様相に対する理解は、南北朝の仏教思想を理解する上で、重要な基準点として作用します。それは時には直接的に象徴と儀礼として具体化して現れかもしれませんが、多くの場合、上部構造を変化させる力として作用します。そして、信仰の多様な様相と思想の様相は、必然的に象徴と儀礼として具体化の過程を経ることになります。したがって、その時期に開かれていた国家的な行事としての護国的な性格の法会、また民衆たちを善導しようという目的が明らかに見える、多様な法会儀式などに対する細かな議論が必要です。幸いなことに、信仰の様相に対する具体的で多様な情報が、敦煌宝蔵を通して、以前よりもはるかに多く私たちに知られている状況にあり

ます。

また、記録資料の他に南北朝仏教にアプローチできる、ほかの一次資料として、南北朝時代の仏教遺跡と遺物が存在します。特に西域から中国北方全域にかけて多様な南北朝時代の仏教石窟が存在し、その仏教石窟は、思想と信仰の様相を象徴化させ、具体化させた多様な事例を直接的に見せてくれます。このほかにも少なからず南北朝時代の仏教遺物と石刻資料とが存在します。これらに対する研究は、幸いにも仏教美術史と文化史の分野で相当程度、進んでいます。ただ韓国の場合、これらの仏像や仏塔、石窟が韓国内の仏教文化財に及ぼした影響に関して論及されるに止まっています。もちろん、当時の仏教交流を念頭に置く時、そのような視点は正当なものです。しかし、交流というものは、一方的な受容ではなく、互換的な観点から理解されなければなりません。したがって、東アジアの仏教の秩序という観点から再度議論する必要があると見ています。ただ、いまだにこれらの分野と思想史との間には少なからぬ距離が存在することは事実です。したがって、南北朝仏教の研究において、これらの分野の研究成果をより多く採用することのできるような方法が積極的に検討されるべきだと思います。そして、それが南北朝の仏教思想を理解する、また別のアプローチを提供してくれるものと期待しています。

結 語

以上で、南北朝時代の仏教思想の研究において注意が必要であると思われる、幾つかの補完されるべき観点について意見を提示いたしました。ここで提起した幾つかの観点は、事実、すでに多くの研究者たちが活用している観点であると思います。しかし、専門化し、細分化する現代の研究者としては、体感としては、個人的な研究としては容易ではないアプローチであると言えるでしょう。幸いにも三国の三つの大学が、それぞれの研究プロジェクトを遂行しながら、同時に協力できる通路を開拓するという稀な機会が得られるようになりました。多様な分野の専門家たちが協力するプロジェクトを進められる機会を通して、可能であれば、適切に分業と協業とがなされていけばという期待を持つようになりました。南北朝時代の仏教を思想的に総合して見ると、仏教土着化の転機が準備された

時期であったと言えます。ライシャワーなど、西欧の学者たちが明快に指摘するように、中国と仏教という巨大な勢力は、とうてい融合することのできないもののように見えます。しかし中国仏教は、初期の反発を抑え、徐々に中国社会に根を下ろしていきました。あるいは、これを仏教の中国的な変容であると見ることもありますが、さりとて中国仏教が仏教の本質を損なったと言うのには無理があります。表意文字である漢文への仏典翻訳の過程で生じた変容、中華思想の土台の上で仏教を受容しようとする民族性、伝統的な忠孝思想に背くかに見える仏教的な修行精神を進んで受容しようとする態度などが合わさった変容であると見なければなりません。

また、一つ注目しなければならない点は、当時の仏教思想家たちが抱いていた仏教の個性の強調に対する関心です。中国の民族宗教と見られる儒教、道教などと競い合った仏教としては、仏教が異端であるという批判に対する反論、そして仏教の宗教性を強調しようという個性化戦略などが重要な関心事であったでしょう。

しかし南北朝時代の仏教の土着化がなされた決定的なきっかけは、北朝仏教の、いわば「王即仏」思想であったとみられます。帝王には出世間の権威が加わり、仏教の立場では、絶対権力者を心強い外護者として備えることにより仏教発展の土台を築くようになりました。南北朝時代後期から隋の建国初期の間に中国に留学していた円光（531-630）は、この北朝仏教の直接的な影響を受けた人物です。彼は589年、すなわち後梁が滅亡した二年後に中国留学に出発し、600年、隋の文帝の時に新羅に帰国しました。彼が真興王を助け、花郎という武士集団を創設し、三国統一の基盤を築いたのも、同じ思想的な脈絡であったと見られます。真興王は転輪聖王の理想を広めようとしていた君主であり、その基盤には円光の助力が大きかったものと見られます。

最後に、同じメイン・テーマのもとで、十年という長期的なスケジュールに沿って共同研究を進めるということであれば、それぞれの大学、ひいては各国の研究プロジェクトで重なる部分を相互に活用し共有することにより、期待を超える研究成果を上げる場となることを望みたいということを付け加えてこの講演を終えたいと思います。

（翻訳担当：佐藤 厚）